

# ひとくち法話 第十回 「私」を問う日常 —『モモ』を通して

一宮市・長誓寺住職 堂宮 淳賢(たみや あつのり)

これまでの日常が変わりゆく今、「本当に大切なことは何か」を問う中で、私はミヒヤエル・エンデの『モモ』(「岩波書店」)を読み直してみたくなった。最近は便利な世の中で、プロのナレーターが朗読した本をアプリで聴けるサービスがある。先日、それを利用して、あらためて『モモ』を聞き始めた。

とある街に現れた「灰色の男たち」によって人々から時間が盗まれてしまい、皆が心の余裕を失くしてゆく。しかし友人の話に耳を傾け、その人に自信を取り戻させてくれる不思議な力を持つ少女モモが、奪われた時間を取り戻すという物語である。

ひとりの「灰色の男」が、モモに語った次の言葉が印象的だ。

「きみがいることで、きみの友だちはそもそももどろろという利益をえているかだ。なにかの役に立つか? いや、立っていない。成功に近づき、金をもうけ、えらくなることを助けているか? そんなことはない。時間を節約しようという努力をはげましているか? まさに反対だ。きみはそういうことをぜんぶじゃまだてしている、みんなの前進をはばんでいる!」(七章 友だちの訪問と敵の訪問)

効率性や生産性を追求し、無駄なものは切り捨てていく。そのような価値観の中では、「忙しい、忙しい」と振り回され、心を亡くす、「亡者」になってしまう。私にとっての「灰色の男」とは何か。その問いが、人生の中で「本当に大切なこと」を選択していくヒントになるかもしれない。

…とこのように、私は妻に対して、自分なりの『モモ』の味わいを語っていた。主人公のモモのように何にも言わずに聞いてくれる妻に、気をよくして話し続ける。

「そうそう! この朗読、倍速で再生できる機能があるんだよ。一・一倍速で聞けば、一時間も短縮できる。すごくない?」と感動を伝えた。すると、思わぬ答えが返ってきた。

「うーん…でもさあ、それって灰色の男に時間盗まれとらん? (笑)」

妻の言葉にグサツと心を刺されてしまった。読書くらい、じっくり時間をかけて味わわなきゃ!

◆東別院ホームページ「お東ネット」などにも掲載いたします。